

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)個人研究2023年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名
	外国語教育研究センター・准教授	町 沙恵子
研究課題	テクノロジーを用いたインターアクションの日英語談話分析(語用論的アプローチ)	
研究期間	2023年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 635,666円 / (採択金額) 650,000円	

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)

本研究では、スマートフォン等のネット検索機能を駆使して、会話参加者がいかに情報を収集・比較・処理しながらインターアクションを行い、合意に到達するかというプロセスの談話分析を行い、さらに日英語対照を試みる。日常生活で頻繁に見られる種類のインターアクションを語用論的観点から分析し、分析結果の日英語対照をすることで、日本語及び英語母語話者のインターアクションスタイルのあり方とその背景にある思考パターンの相違や類似点、さらには文化的背景を明らかにしたい。ゆくゆくは本研究で得られた知見を言語教育や異文化コミュニケーション研究に応用させ、言語のスムーズな習得及び異文化間の相互理解の一助となることを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[談話分析] [語用論] [日英語対照]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2023 年度は SFR 助成金の大部分を用いて、本研究課題の第一段階である、談話分析に使用する日本語及び英語の比較可能な会話データ (日本語母語話者同士または英語母語話者同士のペアによる会話) の収集を行った。具体的には以下を達成することができた。

・発話実験に必要な機材の調達 (2023 年 7 月～8 月)

ビデオカメラ、カメラスタンド、收音マイク、SD カード、実験協力者が実験中に操作するタブレットおよびキーボード、データ処理用ノートパソコンなどの必要な機材を調達した。

・発話実験のデザイン及びパイロット実験の実施 (2023 年 7 月～8 月)

日本語、英語の二言語の対照研究を可能とする会話データを収集するためには同一条件下で両言語の発話実験を実施する必要がある。そのために、日常生活で実際に起こり得そうなシチュエーション、さらに今回の発話実験に参加する全ての協力者 (日本語話者も英語話者いずれも) が自然に取り組むことのできるタスクをデザインした。パイロット実験 (日本語母語話者ペア 2 組) を通して、タスクの指示や合図を送るタイミング、タスクに必要となる時間などを綿密に計画した。

・パイロット実験後の実験内容の調整 (2023 年 8 月)

パイロット実験の結果を経て、以下の点を修正した。

- 1) 自然な状態に近いリラックスした会話データを収集するため、冒頭からタスクの実験を実施するのではなく、最初に協力者二名に自由に会話をする時間を 10 分間設定した。その時間はどのタスクも課さず (録画は行う)、会話を通してリラックスしてもらうよう工夫した。基本的には自由に会話を進めてもらうが、話題が行き詰まったり、気まずい沈黙が多発しないよう、トピックを 3 つ用意した。(①環境のためにしていること。大きいことでも小さいことでも何でもよい。②自分の健康のためにしていること (運動、食事、睡眠、サプリなど)。③今までに購入した、面白いもの・便利なもの・生活を変えたもの・くだらないもの。そのモノがどのように面白い・便利・生活を変えた・くだらないのかを説明する) これらのトピックはあくまで円滑な会話を展開するための補助であり、これらに固執する必要はなく、自由に逸脱して話してよい旨を伝えた。
- 2) データの多様性を追求するため、2 種類のタスクを用意した。タスク 1 は協力者二名が自身の携帯電話や備え付けのタブレットのネット検索機能を用いながら第三者に贈り物を選ぶタスクで、実施時間は 10 分とした。ここでは協力者は贈り相手の性格や好みを話し合いながら最適な価格の品物を選ぶもので、比較的シンプルな作業である。タスク 2 は海外から訪日したゲストに 1 日都内を案内するツアーを考案するタスクで、実施時間は 20 分とした。ここでは二名の協力者は複数の訪問場所の地理的距離、移動時間や時間配分を考慮しつつ、ゲストを楽しませる活動を盛り込むことを求められ、自分たちの経験や知識を共有しながら活発に意見交換をすることが必要となる。
- 3) データの更なる多様性を追求するため、各タスクの後に、贈り物 (タスク 1) や観光ツアー (タスク 2) の企画及びそれに至った経緯の説明を簡単にプレゼンするナラティブのデータも収集した。プレゼン方法やそれにかける時間は協力者に一任した。

・データ収集 (2023 年 8 月～2024 年 3 月)

夏期休暇中から春期休暇中にかけて、協力者を募り、データ収集を行った。

日本語母語話者ペアは 8 ペア収集した。自由会話は計 81 分、タスク 1 は計 97 分、タスク 1 ナラティブは計 9 分、タスク 2 は計 168 分、タスク 2 ナラティブは計 15 分となった。

一方の英語母語話者ペアは 5 ペア収集した。自由会話は計 54 分、タスク 1 は計 70 分、タスク 1 ナラティブは計 6 分、タスク 2 は計 112 分、タスク 2 ナラティブは計 12 分となった。

また日本語母語話者協力者は女性 12 人、男性 4 人であり、英語母語話者協力者は女性 4 人、男性 6 人となった。

研究成果の概要 (つづき)

・会話データの書き起こし及び分析 (2024年2月~3月)

SFR 交付期間中は二言語の会話データの収集を主な目標としていたが、書き起こし及び分析も一部行った。発話の書き起こしソフトウェアも試験的に利用したが、テンポの速い発話や話者同士の発話の重複が多い日本語会話の書き起こしはほぼ不可能であることが判明したため、自身で手作業で行っている。

日本語会話と英語会話の分析を開始したところ、会話の展開 (ターンテイキング、話題の移行、使用される言語資源など)、タスクの進め方、アイデアの提示方法、アイデアに対する反応 (同意表示、からかい、つつこみ、否定など)、会話中のしぐさ (うなづき、ジェスチャー、目線、笑いなど) の仕方に大変興味深い相違点が見られた。今後は量的及び質的分析を進めて、論文及び学会で発表していく。

※この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今後の予定として研究成果を、

- ① 語用論分野で最も権威のある国際ジャーナル、*Journal of Pragmatics* 及び語用論の分野では世界最大規模の学会である国際語用論学会 (International Pragmatics Association, IPrA) の学会誌 *Pragmatics* に論文を投稿する。
国内では社会言語科学会の学会誌『社会言語科学』に論文を投稿する。
- ④ 国際語用論学会 (International Pragmatics Association, IPrA) の19回大会 (2025年6月22日～27日、オーストラリア・ブリスベン) のパネルに応募する。
国内では社会言語科学会及び日本語用論学会の大会で発表することを視野に入れている。